



神
隠
し

旅立ち

一人の男が巨大な三つの塊と対峙していた。

三つの塊からは6本の脚が生え、三つの塊はその体のようだ。赤黒くてヌメツとした質感。蟻のようだ。ここでは小さい部類の赤アリだがゆうに4mはあるし、黒アリにくらべると凶暴で油断ならない。

まずは赤アリが大きな顎で男に襲っていった。男はひょいと軽い足取りで躲したが、赤アリはすぐに2撃目を放ってきた。男は躲せないと分かると右手に持ったデバイスの表面を指で高速でなぞった。

「ガードモード」デバイスから機械音が聞こえると、デバイスの周りから白い帯のようなものが男の体を包みこみ、赤アリの顎による攻撃を軽く受け止めた。

「シザーズモード」さらに男はデバイスをいじると白い帯が変幻し、男の右手に3mを越す巨大な鋏を作り上げた。

「おりゃ！」男は赤アリと鋏同士でチャンバラを始めだした。ガキン！ガキン！鉄のはじけるような音が何度も交錯する。

しかし、男が赤アリの顎の攻撃を縫って、横に回り込むとガキン！と鈍い音を立てた。赤アリの首はドスン音を立てて地面に落ち、首を失った四肢はバタバタと暴れていた。

「上出来だ」男の後ろから声がした。秋島だった。では赤アリと死闘を演じていたのは。

「この1ヶ月頑張ったな、武山。最初はどうなるかと思ったが、そこまで使えれば十分だ」武山は憮然として「一撃で終える予定だったのに」と不満そうだった。

「いやいや、格段の進歩だよ。俺でもこいつ倒すのに半年はかかったんだから」

「私は秋島さんのようにドカンとやりたいんだけど」

「それはケイタイの問題もある。俺のようなフィーチャーフォンは機能がシンプルだからああいった無骨な形での戦い方しかできない。複雑な形は作れないんだ。ただ、ブラインドタッチが可能だから素早い動きがメリットかな。逆にスマートフォンは操作が煩雑だが、使いこなせるようになると複雑な動きが可能になる。一長一短だよ。1ヶ月でここまで進歩したことで満足するんだね」

「ま、いいか」武山はあっさりとな得した。

「さて、お別れだな」秋島は話題を変えた。

「ひととおりのこの世界での生き方も習得したし、俺もそろそろ一人での狩りに戻りたいんでね」

「やはり一緒に脱出する気はないんですか」名残おしそうに武山はつぶやいた。

「おれはこの世界が楽しい。ここに来る前は普通の退屈なサラリーマンだった。売上も最低でね。刺激のある世界に出たかった。今はその全てが揃ってる。出る気はないよ」秋島のは嬉々としていた。

「武山はこの世界を出たいのだろう？なら、前に何回か行った棺桶街に行って同じ目的の仲間を探せ。お前くらいの腕前ならある程度人は集まるはずだ」

ガサガサと背後で音がする。振り向くとラットだった。ただし大きさはアリと同じく軽く6mを超え、ドブネズミなので異臭を放ってより醜悪ではあるが。

「秋島さん、最後にあの技を見せてくださいよ。最初に出会った時の技」

「選別代わりに見せてやるか。いくぜ！」秋島はケイタイの番号を素早くタッチしラットに向ける。「ルシファーズハンマー！」ラットは天空から落ちてきた巨大な鉄の塊の下敷きになった

。

棺桶街

私は棺桶街に行く前にいくつか寄るところがあった。通称「道具通り」なんでも売ってる便利な通りだ。その中の一軒に入った。

「いらっしゃい」いつものオヤジの声がした。「ほお、今日は赤アリの脚かい。いいもの持ってきたね。殻はいい防具になるし、中の筋はいい人口筋肉になる。高めに買うよ」オヤジは早口に喋ると私の前に札束を置いてくれた。

「ありがとう」これで軍資金ができた。

次は「準備屋」だ。ここでいろいろなソフトが手に入る。今回はここでスマートフォンのソフトをバージョンアップと新しいソフトをインストールしたかった。

「どーも」いつものように入ると中は人だかりだ。ここならどんなケータイのソフトが新しいものから古いものまでなんでも揃うからいつも人であふれかえってる。

忙しそうにしてる店員をつかまえて「OSのバージョンアップとミクスユニットをインストールしたい」そう告げると「あーそのタイプのOSはまだバージョンアップしない方がいいよ。バグが多いから。ミクスユニットだけにしときな」店員が親切に対応する。「じゃあ、それで」店員は私のスマートフォンを持って店の奥に行って2~3分で戻ってきた。「できましたよ」私は代金を払って外に出た。

棺桶街。ここは死んだ人の棺桶が並んでいる街。どんなところで死んでもこの街に連れてこられるらしい。ここでならどんな故人しも会えるともっぱらだ。だから死んだ人ばかりではなく、死んだ仲間もその仲間を慕ってそこに集まったりする。いつしかここは人待ちのスポットになっていった。また中には死んだものを生き返らせる「蘇り屋」なんて怪しい店もあるらしいが。仲間を探しに来たものの、どうしていいものかブラブラと歩いていた。

ある棺桶屋の前に巨大な犬が横たわっていて、その上に女が座っていた。巨大な犬は熊のような大きさに凶暴そうなのにその女はこともなげに犬の上でケータイをいじっていた。

妙に気になって「あのお」「ん？」女が聞きかえしてきたので、「その犬、大丈夫なの？」「ああ、ダニーのことね。噛みはしないよ、私以外はね。かわいいものよ。何か用？」

犬の顔を見てちょっとひるんだが、「いや、よくこんな大きな犬を飼いならしているもんだと思って」「飼いならしていないわ、パートナーよ。彼氏の形見なの」となりの棺桶を指差した。「墳島遺跡の最深部までいけたんだけどね。そこでやられちゃった」

女の話が気になった。「狩り？」「いいえ、このふざけた町を出るためよ」見つけたぞ！

「もう少し詳しい話を…」聞こうとしたところで「ワー！」「キャー！」棺桶街の外あたりから悲鳴が聞こえてきた。

仲間

人が群がってこっちに向かって大挙して逃げてくる。どうしようか迷ったが、足はすでに逃げ惑う人とは逆の方向に向かっていて。街の入り口に着いてみると、巨大なムカデたちが人々を襲っていた。5匹、6匹？かなりの数だ。10mもの長い体をグネグネさせながらどんどん人たちを食いちぎっていく。引きちぎられた人々の血臭で立ちくらみがしそうになる。

しかし新しいソフトを試すチャンスだ。スマートフォンをいじりながら戦闘態勢に入った。「ガードモード ウィズ シザーズ！」体全体を白い帯が包み込む、と同時に右手のスマートフォンから鋏が現れた！新しいミクスユニットの効果だ。

「よし！」ムカデ群の中に切り込んでいった。するどい牙の連続攻撃をかわすことはできず攻撃を受けるがガードが効いている。「OK！」攻撃を受けたままシザーズで正面から体を切り刻みにかかる。バツン！1匹目の頭が真っ二つに裂けた！いける！よし、次だ！ムカデの攻撃を何回も躲し、受けながら次々と片付けていく。

あと2匹だ。1匹目の攻撃をかわしてあとにいるもう1匹を始末しようと鋏をきりつける！ガキッ！切れない！？画面を見るとバッテリーが残りわずかになっていた。2つのユニットを同時に使うとエネルギー消費が激しいのか！しまった、計算外だ。脇からもう1匹が噛みついてくる！しかしガードモードの帯が消えかかっている！

「いけ！ダニー！」叫び声と共に私を攻撃しようとしたムカデの体を巨大な犬が噛み千切った。

「次！」ダニーはもう1匹のムカデも噛み千切りぶんぶん振り回してたたきつけた。

ムカデ全滅。しかし。

「なかなかいい戦いぶりだったよ。でもユニットとバッテリーの関係まで考えてなかったところが惜しかったね、詰めが甘いよ」後ろから女の声が聞こえた。ダニーのパートナー。

「正直助かったよ。私は武山、名前を覚えてくれないか」「ユキよ、さっきなんか話しかけようとしたから気になってね」私は彼女の力こそ、必要なものだと感じた。私は思わず切り出した。

「私とこのふざけたゲームをクリアしないか」と。